富山大学極東地域研究センター
CFES News Letter
Center for Far Eastern Studies, University of Toyama
2018.6 発行
Vol.30

Ⅰ　御挨拶

前センター長任期途中での退職により、残る任期 1 年間、暫定的にセンター長を務めさせていただくことになりました。教員補充も予定されており、新たな船出となりました。

極東地域研究センターは、日本海を通じた地方間国際交流が活発な富山県の立ち位置を背景にした我が国の北東アジア地域研究の拠点です。現在、人間文化研究機構の北東アジア地域研究推進事業において、北東アジア地域研究をリードする 6 つの国内研究拠点のひとつに指定され、「北東アジアにおける国際分業の進化と資源の持続可能な利用」をテーマに拠点事業に取り組んでいます。環境省や富山県からの受託研究、科研費研究や産学連携研究など外部資金を活用しながら、小さいながらも豊かな研究ネットワークのもとに活発な研究活動を行っています。

極東地域研究センターは、国立大学が独立法人化する前に、2001 年に文部科学省省令施設として設置された地域研究の研究機関です。北西太平洋地域海行動計画（NOWPAP）への富山県の取り組み、1997 年ロシア船籍のタンカー「ナホトカ号」による重油流出事故などによる日本海をめぐる環境問題への関心が高まり、日本海を通じた地方間国際交流への期待を背にして、極東地域研究センターは設立されました。設立後 18 年目の現在、拠点研究を中心にしつつ、複数のプロジェクトが同時に動くとても「忙しそうな」センターになっています。

私は、極東地域研究センターの設立に関わったメンバーですが、これまでのセンターの紆余曲折を振り返れば、これほど長くセンターと自分のキャリアを重ねることになるとは思ってもいませんでした。設立時の背景を知るスタッフも少なくなり、内外のこの地域に対する関心も大きく変わり、大学改革も進むなか、極東地域研究センターの進むべき方向性は、センター設立後に新たに着任した、そして、今後着任するスタッフの才能豊かな発想に益々支えられることと思います。私のこの任期 1 年の任務は、そうしたスタッフと研究振興課のみなさんが一丸となってセンターが抱える諸課題に取り組めるような、また、参画する教員全員が居心地よく研究に取り組めるような環境を作ることだと思っています。そして、極東地域研究センターが内外の研究機関や支援くださる地域の皆様にとって大切な研究機関だと思って頂けるよう、引き続きスタッフ全員でつとめます。どうぞセンターの活動に今後ともご理解ご協力のほど、よろしくお願いします。

（新センター長：堀江典生）

Ⅱ　研究紹介

2018 年 3 月 14 日～18 日に第 65 回日本生態学会大会が札幌市で開催されました。そこで、我々研究チームは「3D モデルを用いた着生植物の分布調査手法の開発」という内容の研究成果を発表しました。今回はその内容を紹介いたします。

北方林や熱帯雨林などの森林生態系において、樹幹に着生している植物（主に蘚苔類・地衣類）は生産者として、物質循環への寄与、動物のエサや巣の資源等の機能的役割を果たしているといわれています。これら着生植物の宿主木での分布は、宿主木の樹種、樹形や樹齢によって形成される樹幹の微小環境に左右されるとされています。これまでの研究では、現地での標本採取を主とした研究手法を用いていましたが、この方法では標本採取の物理的限界や野外での調査時間が長いといった課題があり、研究対象として調査できる宿主木の数には限りがありました。そこで、我々研究チームは、より多くの宿主木での調査を可能にするため、これまでの研究方法より簡便かつ短時間の野外調査が可能な着生植物の分布調査手法の開発を目指し、カメラの撮影画像から 3D モデルを取得し、着生植物の樹幹での分布状況（位置、面積等）を推定する手法を開発しました。

図 1：色調と空間座標の情報を有した宿主木の 3D モデル画像。

富山大学五福キャンパス構内のソメイヨシノ・ユリノキ・クロマツの樹幹を地面から高さ約 2m までをデジタルカメラで網羅的に撮影し、その撮影画像を用いて樹幹の 3D モデルを作成しました。この 3D モデルから計測した面積の精度を検証したところ、誤差は平均 1.5 %でした。3D モデル上において、ピクセルベースで着生植物植生（蘚苔類・地衣類）と非植生（樹幹部分）を区別し、蘚苔類と地衣類の着生面積をそれぞれ求め、宿主木の樹種の違い、樹幹の方位が着生植物の着生面積に

与える影響を検討しました。その結果、蘚苔類では樹種、地衣類では樹種・方位の違いによって着生面積が大きく異なることが確認されました。このように 3D モデルを用いた研究手法を開発したことによって、従来よりも簡易的に着生植物の分布状況を調べることが可能となりました。

（文責：丸尾文乃）

Ⅲ　広がるロシア研究ネットワーク

2018 年 4 月 24 日に富山国際会議場においてロシア研究ワークショップ「ビジネス・パートナーとしてのロシア極東地域企業：大規模企業調査からの示唆」を富山県、公益財団法人環日本海経済研究所、一橋大学経済研究所ロシア研究センターとの共催で実施しました。岩崎一郎教授（一橋大学）、本センター堀江典生、新井洋史調査研究部部長（環日本海経済研究所）による個別テーマ発表をもとに、杉浦史和教授（帝京大学）、安達裕子教授（上智大学）、志田仁完研究主任（環日本海経済研究所）がパネリストとなりディスカッションを行いました。ロシア極東地域への企業進出を躊躇する原因のひとつに、ロシア極東地域がロシア欧州部に比べ進出先パートナーの質が劣るのではないかという漠然とした不安があります。このワークショップは、環日本海経済研究所で実施したロシアの大規模企業調査をもとに、東西地域間で企業経営にどのような違いがあるかを実証的に分析しようとするものでした。ロシア極東地域とロシア北西地域との地域間の違いを生み出すものは、人材不足であり、その他の企業経営のあり方に大きな違いは見いだせないという結論は、前述の極東地域に対する漠然とした不信感を払拭させるものでした。本研究成果は書籍として出版される予定です。

写真 1：ワークショップの様子。

2018 年 3 月 2 日には、富山大学にて「ロシアにおける人の移動研究ワークショップ」を開催しました。ロシアの移民研究では三名の専門家がモスクワから、またタジキスタンからも一名が来日し、専門的な議論が行われました。その様子は、共催者でもあるモスクワ国際関係大学のホームページでも紹介されました。

本センターは、ロシア科学アカデミー社会政治研究所を始め、各国の研究機関が参画する「ユーラシアの移民の架け橋」プロジェクトに参加しており、世界各国 10 会場で開催されるこのプロジェクトのイベントのトップバッターを務めました。本センターのロシアとの研究交流の一端を担うものとして、今後も本プロジェクトには積極的に関わっていきたいと思います。

（文責：堀江典生）

Ⅳ　今村先生退職記念講演会

2017 年度末で前センター長の今村弘子先生が定年退職されました。これに先立ち、先生の退職を記念する講演会が 2018 年 3 月 8 日に富山県民会館で開催されました。

写真 2：講演会での集合写真。

講演会では、JETRO 時代の先輩である菱田雅晴氏（法政大学教授）、また長く研究をともにされてきた馬駿氏（富山大学教授）のお二人からご講演をいただきました。残念ながら急用で大学時代の後輩である竹中千春氏（立教大学教授）はご欠席となったため、山本が代理でスピーチを読み上げました。いずれも当時の今村先生の貴重なエピソードをご提供いただき会場は大いに盛り上がりました。その後、今村先生から「北東アジア研究に思いを馳せる」と題してご講演いただきました。なぜ北東アジア、とりわけ北朝鮮・中国の問題に取り組むようになったか、研究者として序盤にどのようなご苦労があったかなど丁寧にお話いただきました。

今村先生はセンター運営において、若手が研究を進められるように配慮をしてくださいました。そのご配慮に少しでも報いることができるよう今後も研究に邁進していきたいと思います。

（文責：山本雅資）

連絡先住所：〒930-8555　富山県富山市五福３１９０　富山大学 研究推進機構 極東地域研究センター
電話：076（445）6510　ファックス：076（445）6520
ホームページ <http://www3.u-toyama.ac.jp/cfes/index.html>